（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　大野　公賀

豊子愷（フォン・ツーカイ、ほうしがい、1898 ～ 1975）は、近現代中国の大文化人で、エッセイストにして『源氏物語』、夏目漱石など日本文学翻訳家、さらには日本の竹久夢二の影響を受けた挿絵画家であり、仏教的ヒューマニストでもある。本論文は中華民国期における豊の独自の倫理思想形成過程と多彩な文学・芸術活動を、主に 1930 年代上海の国民党でも共産党でもない、啓蒙による国民創生と国家建設を目指したリベラリスト・グループ「開明同人」（出版社開明書店周辺の知識人たち）との関わりに注目しつつ論じたものである。

第一章「自己確立のための模索：浙江省立第一師範から東京留学まで」は、1910 ～ 20 年代前半における豊の個人主義的思想形成を論じた。第二章「愛国的「啓蒙主義」の試みと挫折」は、豊の 20 年代後半における立達学園での自由主義教育と開明書店での啓蒙主義的文化活動を分析し、教育・出版活動による文化圏形成と文化資本の共有化を論じたもので、優れた民国期上海知識人論となっている。

第三章「初期仏教観：仏教帰依から無常観の克服まで」は、豊の仏教帰依と豊が弘一法師と共同で作成した『護生画集』第一集（1929 年）について、第四章「思想的円熟：「生活の芸術」論の形成」は、日中戦争期までの豊の芸術観と宗教観および文明観についてそれぞれ論じたもので、彼が積極的に宗教や芸術による涵養を強調する立場に立つことにより、自立的な思想形成を遂げたことを解き明かした。

第五章「童心説と護心思想」は、仏教の『大乗起信論』の影響および『護生画集』の思想的意義について考察し、日中戦争期にあっても「残忍な心を取り除き、慈悲心を育て、人に接し世に処す」護生思想へと展開していく過程を明確に描き出している。終章は豊の文学・芸術が人民共和国で辿った運命を描くものである。

本論文は、中国エスペラント運動、老荘思想およびラスキン、モリスら近代ヨーロッパ思想との影響関係について充分に論を展開していない。しかしこれまで先行研究が日本と西洋からの芸術受容とその中国的展開を中心に論じてきたのに対し、本論文は豊子愷にとって芸術と宗教は現実逃避の手段ではなく、むしろ現実を生き抜くのに不可欠な思想的営為の産物であり、民族と国家の再生を追求するための方法であった点を解明するという顕著な成果をあげており、本審査委員会はその内容が博士(文学)論文として十分な水準に達しているとの結論を得た。